

各火山の 8 月の活動解説

【北海道地方】

めあかんだけ 雌阿寒岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。

雌阿寒岳ではここ数年、地震増加、浅部熱活動の活発化を示す全磁力¹⁾の減少や 96-1 火口の噴煙量増加などがみられている。今後の火山活動の推移に留意が必要である。

とからだけ 十勝岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にあるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

たるまえん 樽前山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

4 日に国土交通省北海道開発局の協力により上空からの観測を実施した。山頂溶岩ドーム周辺の噴気等の状況に大きな変化はなく、赤外熱映像装置²⁾による観測では、地表面温度分布の状況に特段の変化はなかった。

山頂溶岩ドーム周辺では、1999 年以降、高温の状態が続いており、突発的な火山ガス等の噴出に注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

アトサヌプリ [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

たいせつぜん
大雪山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

くったら
倶多楽 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

うずざん
有珠山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

ほっかいどうこまがたけ
北海道駒ヶ岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

えさん
恵山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

【東北地方】

あきたこまがたけ 秋田駒ヶ岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

24 日に岩手県の協力により実施した上空からの観測では、女岳の山頂北部、北斜面、北東斜面及び南東火口で地熱域²⁾が引き続き確認されたが、新たな地熱域は認められなかった。

地震活動は概ね低調で、地殻変動及び噴気活動にも変化はみられないが、地熱活動が続いているので今後の火山活動の推移に注意が必要である。

ざおうざん 蔵王山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

22 日 16 時 24 分頃に継続時間のやや長い火山性微動が発生した。

23 日に現地調査を実施した結果、御釜や振子沢の状況、丸山沢の噴気に特段の変化はみられず、火山活動に特段の変化はみられなかった。

蔵王山では、2013 年から 2015 年にかけて、火山性地震や火山性微動が増加するなど火山活動の高まりがみられた。その後も火山性微動が時々発生しているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

あづまやま 吾妻山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

大穴火口及び周辺の噴気活動や地熱活動はやや活発な状態が続いている。

大穴火口付近では小規模な噴火が発生する可能性があるので、大穴火口周辺（火口から概ね 500m の範囲）では弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。また、大穴火口の風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾、火山ガスに注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

いわきさん
岩木山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

はっこうださん
八甲田山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

とわだ
十和田 [噴火予報（活火山であることに留意）]

あきたやけやま
秋田焼山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

いわてさん
岩手山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

ちょうかいさん

鳥海山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

くりこまやま

栗駒山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

あだたらやま

安達太良山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

ばんだいさん

磐梯山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

【関東・中部地方及び伊豆・小笠原諸島】

くさつしらねさん

草津白根山〔火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）〕

湯釜火口の北から北東内壁及び水釜火口の北から北東側にかけての斜面での熱活動や、北側噴気地帯での活発な噴気活動が継続している。東京工業大学によると、北側噴気地帯のガス組成と湯釜湖水の化学成分には火山活動の活発化を示す変化が引き続きみられ、湯釜の水温は平年よりも高い状態が続いている。

小規模な噴火が発生する可能性があることから、湯釜火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。噴火時には、風下側で火山灰や小さな噴石³⁾が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

また、ところどころで火山ガスの噴出が見られ、周辺のくぼ地や谷地形などでは滞留した火山ガスが高濃度になることがありますので、注意が必要である。

あさまやま

浅間山〔火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）〕

山頂火口からは、白色の噴煙が火口縁上概ね 300m 以下で経過している。

山頂火口で、夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映⁴⁾が 1 日、7 日及び 11 日に観測された。

10 日及び 23 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は 1 日あたり 200～500 トン（7 月 6 日：300 トン）とやや多い状態であった。

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体に感じない火山性地震は多い状態となっており、火山活動はやや活発な状態で経過している。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。また、風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾に注意が必要である。

にいがたやけやま

新潟焼山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火

山であることに留意）〕

10 日に新潟県消防防災航空隊の協力により実施した上空からの観測では、山頂付近に新たな明瞭な降灰の跡は認められなかった。7 月 19 日に東斜面で確認された、噴気孔から流れ出たと考えられる泥水の流下は、今回の観測では認められなかった。

2015 年夏頃から山頂部東側斜面の噴煙がやや高く上がる傾向が認められ、12 月下旬からは噴煙量も多くなっている。ごく小規模な噴火によると考えられる火山灰が 5 月や 7 月に確認されている。GNSS⁶⁾の観測では、2016 年 1 月頃から新潟焼山を南北に挟む基線で伸びがみられている。

5 月 1 日に振幅の小さな火山性地震が増加した後、火山性地震は次第に減少しているが、2015 年以降の地震回数は、2014 年以前と比べてやや多い状態が続いている。

今後も、想定火口内（山頂から半径 1 km 以内）に影響を及ぼすような噴火が発生するおそれがあるため、火山活動の推移に注意が必要である。

みだがはら

弥陀ヶ原〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

弥陀ヶ原近傍の地震は少ない状態で経過している。

以前から熱活動が活発である立山地獄谷では、2012 年 6 月以降の観測で噴気の拡大・活発化や温度の上昇傾向が確認されているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。また、この付近では火山ガスに注意が必要である。

おんたけさん

御嶽山〔火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）〕

遠望カメラによる観測では、白色の噴煙が火口縁上概ね 300m 以下の高さで経過している。

火山性地震は少ない状態で経過しているが、2014 年 8 月以前の状況には戻っていない。今期間、低周波地震は観測されなかった（7 月：3 回）。火山性微動も観測されていない。

2014 年 10 月以降噴火の発生はなく、火山活動は緩やかな低下傾向が続いている。火口列からの噴煙活動や、地震活動が続いていることから、今後も小規模な噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒してください。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾に注意が必要である。

はこねやま

箱根山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

大涌谷に設置している火口カメラによる観測

では、大涌谷の火口や噴気孔及び温泉供給施設から引き続き噴気が勢いよく噴出しているのを確認している。大涌谷周辺での噴気の高さは概ね 500m 以下で経過している。

火山性地震の発生は少なく、地震活動は低調に経過している。また、地殻変動観測では、特段の変化は見られていない。

一方、大涌谷周辺の想定火口域では、噴気活動が活発なところがある。大涌谷周辺の想定火口域では、噴気や火山ガスに引き続き注意が必要である。

伊豆大島【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

火山性地震は少ない状態で経過している。震源は三原山周辺の浅いところと西方沖に分布している。

今期間、天候の影響により現地調査は実施していないが、これまでの現地調査結果によると、三原山山頂火口内にある中央火口の最高温度及び地表面温度分布²⁾は、1999 年以降ほぼ同じ状況で経過している。

地殻変動観測では、短期的な膨張や収縮を繰り返しながら、長期的には地下深部へのマグマ供給によると考えられる島全体の膨張傾向が続いている。その他の観測データには特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

三宅島【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

19 日に実施した現地観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は数十トン程度以下であった（前回 7 月 4 日：約 60 トン）。

5 日に実施した現地調査では、主火口内及びその周辺で引き続き高温領域²⁾が認められ、前回の観測（7 月 11 日）と比べて、火口内の地形及び高温領域の分布に特段の変化は認められなかった。

山頂浅部を震源とする地震は概ね少ない状態で経過している。

主火口における噴煙活動及び火山ガスの放出が継続していることから、火口内では噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、山頂火口内及び主火口から 500m 以内では火山灰噴出に警戒が必要である。また、火山ガスの放出が継続していることから、風下にあたる地域では火山ガスに注意が必要である。

西之島【火口周辺警報（火口周辺危険）】←17 日に火口周辺警報（入山危険）から火口周辺警報（火口周辺危険）に引き下げ及び火山現象に関する海上警報を解除

海上保安庁が 18 日に実施した観測では、火口からの噴気や火山ガスの放出は確認されなかった。

2013 年 11 月以降続いていた噴石等を放出する噴火や溶岩の流出は、2015 年 11 月下旬以降はいずれも確認されていない。2015 年 12 月以降は、地表面温度が低下した状態が続いている。2016 年 5 月頃から地殻変動観測で火口周辺の沈降と考えられる変動がみられており、6 月には火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾の低下も確認されている。

このように、西之島では、火山活動に明らかな低下が認められ、島内の広い範囲で警戒が必要な噴火が発生する可能性は低下したと考えられる。このため、17 日 15 時 00 分に火口周辺警

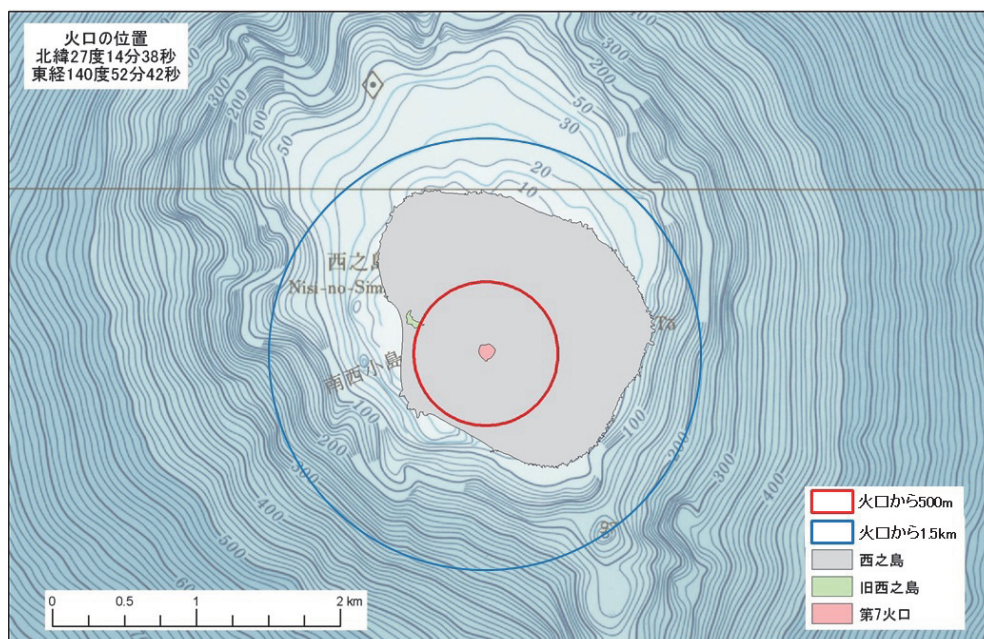


図 西之島 警戒が必要な範囲（第 7 火口から概ね 500m 以内の範囲）

報（入山危険）を火口周辺警報（火口周辺危険）に引き下げ、警戒が必要な範囲を火口から概ね 1.5km から概ね 500m に縮小した。あわせて、噴火による影響が海上まで及ぶおそれがなくなったことから、火山現象に関する海上警報を解除した。

一方、火口付近には高温領域が引き続き確認されており、火道域に海水が浸入した際には小規模な噴火が発生する可能性があることから、火口から概ね 500m の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。また、これまでの噴火で流れ出た溶岩は、表面が冷え固まっていますが、表面に生じた割れ目の一部が高温になっているほか、地形的に崩れやすくなっている可能性が考えられるため、火口から概ね 500m を超える範囲でも注意が必要である。

硫黄島【火口周辺警報（火口周辺危険）及び火山現象に関する海上警報】

火山性地震はやや少ない状態で経過している。GNSS⁶⁾ 連続観測によると、地殻変動は隆起及び停滞を繰り返している。

硫黄島の島内は全体に地温が高く、多くの噴気地帯や噴気孔があり、過去には各所で小規模な噴火が発生している。火山活動はやや活発な状態で推移しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生すると予想されるので、従来から小規模な噴火が発生した地点（ミリオンダラーホール（旧噴火口）等）及びその周辺では噴火に警戒が必要である。

福德岡ノ場【噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報】

海上保安庁海洋情報部、第三管区海上保安本部、海上自衛隊及び気象庁によるこれまでの観測によると、福德岡ノ場付近の海面には長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

今後も小規模な海底噴火が発生すると予想されるので、周辺海域では噴火に警戒が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

なすだけ
那須岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

にっこうしらねさん
日光白根山【噴火予報（活火山であることに留意）】

やけど
焼岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

のりくらだけ
乗鞍岳【噴火予報（活火山であることに留意）】

はくさん
白山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

ふじさん
富士山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

いずとうぶかざんぐん
伊豆東部火山群【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

にいじま
新島【噴火予報（活火山であることに留意）】

こうづしま
神津島【噴火予報（活火山であることに留意）】

はちじょうじま
八丈島【噴火予報（活火山であることに留意）】

あおがしま
青ヶ島【噴火予報（活火山であることに留意）】

【九州地方及び南西諸島】

九重山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められないが、GNSS⁶⁾ 連続観測によると、一部の基線で伸びの傾向が認められるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

阿蘇山【火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）】

中岳第一火口では、5 月 1 日に発生したごく小規模な噴火後、噴火は観測されていない。

8 月に実施した現地調査では、中岳第一火口内に灰緑色から灰白色の湯だまりを確認した。また前月に引き続き、ごく小規模な土砂噴出を確認した。湯だまりの量は中岳第一火口底の 7 割であった。2 日、10 日、25 日、31 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾ は、1 日あたり 1,500～1,900 トン（7 月：1,200 トン）と多い状態であった。

火山性微動の振幅は、やや大きな状態で経過した。

GNSS⁶⁾ 連続観測では、深部にマグマだまりがあると考えられている草千里を挟む古坊中一長陽（国）の基線で 2015 年 8 月頃からわずかな伸びの傾向がみられていたが、2015 年 11 月頃から停滞している。

中岳第一火口では、火山性微動の振幅がやや大きく、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が多い状態であり、今後も火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾ 及び火砕流に警戒が必要である。風下側では降灰、風の影響を受ける小さな噴石³⁾ 及び火山ガスに注意が必要である。

雲仙岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

火山活動は静穏に経過しているが、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

きりしまやま しんもろだけ **霧島山（新燃岳）[火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]**

1 日に新湯温泉付近及び韓国岳山頂から現地調査を実施した。新湯温泉付近からの観測では、2008 年 8 月の噴火で形成された西側斜面の割れ目付近で引き続き弱い噴気が認められた。また、割れ目の下方でもごく弱い噴気が認められた。赤外熱映像装置²⁾による観測では、噴気が上がっていた周辺で、弱い熱異常域となっていることを確認した。

韓国岳山頂からの観測では、新燃岳火口内に留まる程度の噴煙を確認した。2008 年 8 月の噴火で形成された西側斜面の割れ目付近で引き続き弱い噴気が認められた。赤外熱映像装置による観測では、火口内及び西側斜面の割れ目付近で温度の高い部分が認められたが、熱異常域の分布に特段の変化は認められなかった。

新燃岳付近を震源とする火山性地震が時々発生した。

傾斜計⁷⁾では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められない。

GNSS⁶⁾連続観測によると、新燃岳の北西数 km の地下深くにあると考えられるマグマだまりの膨張を示す地殻変動は、2015 年 1 月頃から停滞している。また、新燃岳周辺の一部の基線で、2015 年 5 月頃からわずかに伸びの傾向が認められていたが、2015 年 10 月頃から停滞している。

新燃岳では火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、新燃岳火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石³⁾（火山れき⁸⁾）が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

降雨時には、泥石流や土石流に注意が必要である。

きりしまやま **霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）[噴火予報（活火山であることに留意）]**

遠望観測では硫黄山で時々噴気が観測されており、12 日に最高で火口の稜線上 30m まで上がった。

1 日、25 日及び 29 日に実施した現地調査では、硫黄山火口内及び火口周辺で引き続き噴気を確認した。赤外熱映像装置²⁾による観測では、熱異常域は前回（7 月 27 日）に比べわずかに広がっていた。硫黄山の火口周辺の熱異常域は引

き続き拡大傾向にあるが、温度や噴気の量に大きな変化は認められない。

火山性地震は時々発生し、月回数は 32 回（7 月：43 回）と少ない状況であった。震源は、主に硫黄山付近の海拔下 0～2 km に分布した。火山性微動は 2 月 11 日以降、観測されていない。

傾斜計⁷⁾では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められない。

GNSS⁶⁾連続観測によると、えびの高原（硫黄山）周辺の一部の基線では、2015 年 5 月頃からわずかに伸びの傾向が認められていたが、2015 年 10 月頃から停滞している。

えびの高原（硫黄山）周辺では、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められないが、熱異常域の拡大が続いており、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

火口周辺では火山ガスに注意が必要である。活火山であることから、規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、注意が必要である。

さくらじま **桜島[火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）]**

南岳山頂火口では、ごく小規模な噴火を時々観測した。昭和火口では、噴火は観測されなかった。

25 日に実施した現地調査では、昭和火口の形状は前回（2016 年 2 月 18 日）の観測と比較して、大きな変化は認められなかった。赤外熱映像装置²⁾による観測では、昭和火口近傍及び南岳南東側山腹では、これまでと同様に熱異常域が観測されたが、特段の変化は認められなかった。

火山性地震の月回数は 154 回と少ないながらも、前月（7 月：62 回）よりやや増加した。火山性微動の継続時間は、月合計 22 分で、前月（7 月：33 分）と同様に少ない状態であった。

5 日、22 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は 1 日あたり 40～200 トン（7 月：30～60 トン）と少ない状態であった。

傾斜計⁷⁾では山体の膨張を示す変化は認められない。一方、桜島島内の一部の伸縮計⁹⁾では、7 月頃からわずかな伸張がみられている。

GNSS⁶⁾連続観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の膨張を示す伸びの傾向が引き続きみられる。島内では、2015 年 8 月の急激な山体膨張の変動以降、山体の収縮傾向がみられていたが、2016 年 1 月頃から停滞している。

桜島では、地殻変動観測で始良カルデラの膨張が続いていることから、火山活動の活発化の可能性もあり、今後の推移に注意が必要である。

昭和火口及び南岳山頂火口から概ね 2 km の範

囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾及び火砕流に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石³⁾（火山れき⁸⁾）が遠方まで風に流されて降るため注意が必要である。爆発的噴火に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意が必要である。また、降雨時には土石流に注意が必要である。

さつまいおうじま **薩摩硫黄島【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】**

火山活動に特段の変化はないが、硫黄岳山頂火口では噴煙活動が続いているため、火山灰等が噴出する可能性がある。また、火口付近では火山ガスに注意が必要である。

くちのえらぶじま **口永良部島【火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）】**

口永良部島では、2015 年 6 月 19 日のごく小規模な噴火後、噴火は観測されていない。

遠望カメラによる観測では、噴煙が最高で火口縁上 700m まで上がった。

31 日に実施した現地調査では、これまでの観測と同様に新岳火口および新岳火口西側割れ目付近から白色の噴煙が上がっており、火口周辺の地形や噴気等の状況に変化はみられなかった。

また、赤外熱映像装置²⁾による観測では、2015 年 3 月頃から 5 月 29 日の噴火前に温度上昇が認められていた新岳火口西側割れ目付近の熱異常域の温度は、引き続き低下した状態で経過した。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は 1 日あたり 100～200 トン（7 月：200～300 トン）とやや少ない状況であったが、2014 年 8 月の噴火前よりもやや多い状態で経過した。

火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微動は 2015 年 7 月以降、観測されていない。

GNSS²⁾連続観測では、火口を挟む山麓の基線長は 2016 年 1 月頃から縮みの傾向が認められていたが、7 月 4 日以降は観測点が障害となったため不明である。その他の山麓の基線長では、火山活動によると考えられる変化は認められなかった。

2015 年 5 月 29 日と同程度の噴火が発生する可能性は低くなっているが、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2014 年 8 月の噴火前よりもやや多い状態で経過していることから、引き続き噴火の可能性はある。

新岳火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾及び火砕

流に警戒が必要である。向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒が必要である。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石³⁾が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。降雨時には土石流の可能性があるので注意が必要である。

すわのせじま **諏訪之瀬島【火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）】**

おたげ
御岳火口では、爆発的噴火が 26 回発生するなど、活発な火山活動が継続した。

今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生すると予想されるので、火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく小さな噴石³⁾が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

つるみだけ がらんだけ **鶴見岳・伽藍岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】** きりしまやま おはち **霧島山（御鉢）【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】**

- 1) 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定される。
- 2) 赤外熱映像装置による。赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感じて温度分布を測定する測器である。熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。
- 3) 噴石については、大きさによる風の影響の程度の違いによって飛散範囲が大きく異なる。本文中「大きな噴石」とは、「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とは、それより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことである。
- 4) 赤熱した溶岩や高温の火山ガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象。
- 5) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた水蒸気や二酸化硫黄、硫化水素など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマが浅部へ上昇するとその放出量が増加する。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用している。
- 6) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。
- 7) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがある。
- 8) 霧島山・桜島では「火山れき」の用語が地元で定着していると考えられることから、付加表現している。
- 9) 火山活動による地殻の伸び縮みを観測する機器。マグマ溜まりや火道内の圧力増加によって生じる火口周辺の変化が観測されることがある。